

苺パニック 4

I c b i g o & S o u

風

fuu

eternity



エタニティ文庫

目次

苺パニック 4 5
～北の国編～

書き下ろし番外編
とんでもない視察 337

莓パニック 4

～北の国編～

1 気になる準備（苺）

クリスマスが過ぎ、日常が戻ってきた。ここは鈴木苺のワンルームマンション。わけあって、彼女の勤め先の宝飾店の店長である、藤原爽もここに寝泊まりしている。

苺は寝起きが悪く、朝の身支度を終え、玄関に向かうときになっても、まだ寝ぼけていた。

「鈴木さん。ほら、ちゃんと歩いて」

苺が今日もなんとか起き出して玄関へと向かっていると、藤原から叱責が飛んできて、反射的に「はい」と返事をした。

「ふわふわあ〜」

まだ頭がぼんやりしている。

「……しゃんとして。いい加減、目を覚ましなさい」

背中をパンと叩かれ、その勢いでつんのめりそうになる。

「危ない！」

叫び声と同時に、力強い腕に支えられた。がっちりと自分を抱えてくれている。

「まったく、この寝覚めの悪さには、ほとほと呆れますね」

苺は眉を寄せた。まったくはこっちの台詞だったの。危うく転びそうになったじゃないか。

「ついに起きましたか？」

「ついに起きたですよ」

藤原のきつい口調を真似して答えつつ、今朝のいきさつを思い出す。

藤原に乱暴に起こされたこと……急かされて顔を洗ったこと……トイレに入っていると、早く出て来いと怒鳴られたことなど。

「朝ご飯……食べてないですよね？」

玄関で靴を履きながら、苺は自分のお腹を撫でて言った。

食べた記憶がないし、お腹も空いている気がする。

「食べていませんよ」

「ですよね。なんで……」

なぜ朝ご飯を食べないのか質問しようとしたが、もしかして自分が大寝坊をしたのではないかと不安になり、「いま何時なんですか？」と問う。

「七時半ですよ」

「へっ？」

七時半？ まだ七時半なのか？

「寝坊したのかと思って、焦っちゃったじゃないですか」

頬を膨らませて文句を言う。

「予定を変更したのですよ」

予定を変更？

「あの……」

「朝食は私の屋敷で食べます」

母は唇を尖らせた。またかという気持ちだ。

店長さんときたら、いつだって急に言うんだからなあ。

でもそっか……店長さんの家で朝食か……

たぶん店長さんの屋敷で執事頭を務める吉田の善ちゃんか、料理長さん……つまり、

ボスシエフさんにお屋敷で食べませんかと誘われたんだろうな。

ちよつと胸が弾んできた。店長さんの家で朝食つてのは悪くない。ボスシエフさんも

善ちゃんも好きだし……

だけど、店長さんの祖母である羽歌乃おばあちゃんのお屋敷に行くのは、もうこりこり。

一昨日のことを思い出し、顔が歪む。母は羽歌乃に、ろくでもないクリスマスプレゼントをあげてしまったのだ。それは、藤原におかしな贈り物をプレゼントされた仕返しとして用意したものだったのだけど……成り行きで羽歌乃の手に渡ってしまった。

……おばあちゃんの機嫌を、きつと損ねてしまってるだろうな。困ったなあ。

藤原の車に乗ると、あつという間にお屋敷に着いた。玄関には微笑みを浮かべた藍原要がいて、母はちよつとびっくりさせられた。ちなみに藍原は、藤原の部下で、母の勤める宝飾店の先輩だ。

「お帰りなさいませ、爽様」

なんで善ちゃんじゃないんだろう？ 執事頭である善ちゃんが出迎えてくれるものと思っていたのに……

あつ、そういえば一昨日、屋敷をあとにする母たちを見送ってくれたとき、なんか調子が悪そうだったけど……やっぱり、具合がよくなかったんじゃない？

「あ、藍原さん……」

「鈴木さん、おはようございます」

「はい。おはようです。あの、なんで藍原さんが？ 善ちゃんはどうしたんですか？」

心配になって尋ねると、藍原はやわらかな笑みを浮かべる。

「吉田さんは、少々急ぎの用がありました」

「そうなんですか？」

「どうやら具合が悪いわけではないらしい。苺はほっとした。」

「さあ、朝食の用意はできております」

藍原は急かすように言い、さっさと歩き出した。藤原は無言でそのあとをついてゆく。機嫌でも悪いのだろうか？ 苺は藤原の神経を逆撫でしないよう、そつと話しかけた。

「店長さん、なんでしゃべんないんですか？」

苺の問いに、藤原は視線を投げてきた。

「別に理由などありませんよ。ただ……」

「ただ？」

「いまは仕事のことで頭がいっぱいなのですよ」

ああ、仕事か……

確かにいま藤原は、かなり忙しいようだ。

それなのに昨日の午前中も、いきなり苺のパスポートを取るために半日潰したりして……

まったく、よくわからない店長さんだよ。余計なこととしてないで、仕事をすればよかったのにさ。店長さんって、要領がいいのか悪いのか、わっかんないな。

藍原が通してくれたのは、藤原の部屋だった。テーブルにサンドイッチと紅茶の用意がしてある。

テーブルに藤原と向かい合って座るなり、すぐさま食べ始めるよう藍原が急かしてきた。

藤原と藍原の様子を気にしつつも、苺は彩りよく盛りつけてある一口サイズのサンドイッチを手に取り、頬張る。

おお、うまいっ！

「準備は抜きなく整いそうか？」

クリーミーなチーズサンドに舌鼓を打っていると、藤原が藍原に声をかけた。

「はい。いまのところ問題はありません」

「そうか」

藤原は返事をしながら、俯いて不審な動きをしている。

藤原の手元をこっそり窺った苺は、思わず目を見開いた。

そ、そいつは、苺が昨晚握った三つのおにぎりじゃないか。

……こんなところまで持ってきていたとは。

店長さんがおにぎり好きだっことは知っているけど、こんな贅沢なサンドイッチを前にして、なんで苺のおにぎりを食べようとするのか、わけがわからないよ。サンドイッ

チのほうが絶対美味しいってのにさ……
 そんなの食べないで、こっちを食べた方がいいですって……と言いたくてたまらなかつたが、やめておいた。過去に何度も同じやりとりをしているのだ。藤原がなんと答えるかなんて、たやすく想像できる。

藤原がおにぎりを食べ始めたところで、側に立っていた藍原が分厚いファイルを藤原の前に置いた。すると藤原は、おにぎりを頬張りながら片手でそのファイルを捲り、目を通してゆく。

「なんか、めっちゃ忙しいみたいですね？」

苺は、手で合図を送って藍原を呼び寄せ、藤原に聞かれないよう、声をひそめて話しかけた。

「忙しいですよ」

藍原に話しかけたのに、答えたのはファイルを見ている藤原だった。

「では、私は所用がありますので。鈴木さん、なるべく早く食べ終えてくださいね」

いつもはやさしいのに、藍原は珍しく釘を刺すように言い、部屋を出て行った。

閉じたドアをポカーンと見つめているうちに、なんだか笑いが込み上げてきた。

だっていまの藍原さんの口ぶり、まるで店長さんのようだった。

口元に笑みを浮かべ、苺は藤原に視線をやった。

藤原はファイルに集中している。話しかけたら邪魔になっちゃってしまっただろう。

藍原が何をしに行ったのか気になるが……ここは言われた通り、さっさと食べ終えよう。

それにしても、こいつはうまいな。

苺はサンドイッチの美味しさに相手を崩した。

2 遊び過ぎの代償 〈爽〉

指についたご飯粒を口に入れ、爽は次のおむすびを手に取るうとした。だが、お目当てのものが手に触れない。

うん？

ファイルから目を上げ、机の上を見る。そこにはおむすびが包んであったラップしかなかった。

おむすびは三つあったはずだ。ひよっとして、もうすべて食べてしまったのだろうか？ まるで記憶がない。

爽は目の前にいる苺に視線を向けた。苺はもぐもぐと口を動かしている。

じーっと見つめていると、爽の視線に気づいた苺は、動揺したように目を泳がせた。苺と目が合う。

……まさか苺が？

「鈴木さん、何を食べているんです？」

「はい？ もちろんサンドイッチですよ」

これこれというように、サンドイッチを指す。嘘はついていないようだ。つまり……私は知らぬ間に、おむすびをすべて食べ終えてしまったのか？

味わった記憶がなくて、がっかりする。

「あの、店長さん？ どうかしたんですか？」

「いいえ……なんでもありませんよ」

そう言ったが、苺は納得できないという顔をしている。

「苺に何を食べているのかって聞いたとき、まるで犯罪者を見るような目をしてましたけど？」

普段は鈍にぶいくせに、今日はずいぶんすべとと鋭いじゃないか。

彼女の疑いの目を逸よそらそうと、こじつけの答えを返す。

「サンドイッチには種類がいくつもあるでしょう？ 貴女がとても美味しそうに食べているので、どれなんだろうと思ったのですよ」

苺が指さしたあたりのサンドイッチを手に取り、爽は口に入れた。

「うむ、美味しいですね」

「でっしょう？ 口の中でチーズがふわって感じでとろけちゃうんですよ。お野菜もたっぷり、めっちゃ美味しいですよ。……なのに店長さん、どうしておにぎりなんか食べてるんですか？ もったいない」

もったいない？ どうやら苺は、自分の作ったおむすびの美味しさをわかっていないようだ。

「苺、もう食べ終わりましたよ」

ティーカップを置いた苺は、得意そうに声を上げた。先に食べ終えたことで、私に勝った気であるらしい。勝負などしていかないのに……

まあ、なるべく早く食べ終えるよう、要が釘を刺していたからな。

苺が両手を合わせて「ご馳走様でした」と言い、爽もカップに残った紅茶を飲み干した。さて、出掛ける支度に取りかかるとしよう。爽は携帯を取り出し、吉田に電話をかけた。

「はい。爽様」

爽は「どうだ？」と尋ねたが、吉田の落ち着き払った第一声で答えはおのずと知れた。「準備は着々と進んでいます」

予想通りの返事に「そうか。では引き続き頼む」と言い、通話を終える。

「店長さん」

携帯をポケットにしまっていると、苺が呼びかけてきた。

「なんですか？」

「急がなきゃいけないんじゃないんですか？ 藍原さん、なんだか慌てていたみたいだし……」

様子を窺うように聞いてくる。このあとに何が待ち受けているのかわからないのが、落ち着かないらしい。

「準備はつつがなく進んでいますよ」

「なんの準備なんですか？」

はぐらかそうとしたのに、苺は突っ込んでくる。

「店長さん、お仕事、すっごく忙しいんでしょう？ もう遊んでちゃ駄目ですよ」

爽は眉を上げ、苺を見つめた。

「私は遊んでなどいませんが？」

「時間をいっぱい無駄にしたじゃないですか。ほら、パスポートの手続きとか……それで仕事が多忙ちゃったんでしょ？」

確かに苺の言う通りだ。ここ最近、自分は苺で遊び過ぎている。だが、無駄な時間を過ごしたとは思っていない。

「無駄とは言われたくありませんね」

「はい？」

「無駄とは思っていません。いまこういう形で遊び過ぎた代償を払うことになっているとしても……好きでそうしているのですから、構わないでしょう？」

「ま……まあ、そうかもですけど……無理をし過ぎて倒れちゃうかもしれないですよ」
「体調管理はちゃんとしていますから、ご心配には及びませんよ」

素っ気なく返すと、苺がむっとする。せつかく心配してやっているのに、とても思っているんだろう。

ドアがノックされたあと、「爽様」と要の声がした。てっきり準備を終えた吉田が来ると思っていたので、いくぶん戸惑う。

「入れ」

返事をする、要が大きな箱を抱えて入ってきた。もちろん爽はその箱の中身を知っている。

苺は箱に興味津々な眼差しを向けていた。

爽は何も言わずに要に歩み寄り、箱を受け取った。

「吉田はどうしたんだ？」

「靴を用意なさっています。サイズがないので」

「ああ、そうか。それで、用意できるのか？」

「はい。何がなんでも、お持ちするとのことでした」

要は苦笑しつつ報告する。思わず爽も笑ってしまった。

「鈴木さん、こちらにいらっしやい」

爽は苺を促して部屋を出た。

「はい」

間延びした返事をしながら、苺は素直についてくる。

空いている部屋に移動し、爽はすぐさま箱の蓋を開けた。そして、ひととおり中身を

確認する。

「ほほお、これに着替えろってんですね？」

隣にいる苺が覗き込みながら聞いてくる。

爽は苺に向き直った。

「ええ。十分以内に着替えを終えて下さい」

命じるように言うと、苺は「五分もかからないですよ」ときつぱり即答する。

「おや、そうですか？」

「だって着替えるだけだし……」

苺は服を取り出しながら言う。

「へーっ、黒いジャケット……ですか？ あれれっ？」

ジャケットを手にしたまま箱の中に視線をやった苺は、戸惑いの声を上げた。

「これって、ネクタイ？ お、およっ？ これってえ？」

箱の中身を片手で引っ掻き回していた苺は、入っているものに困惑したようだった。

さて、あれこれ聞かれる前に、この場から去るとしよう。

爽はさっさとドアに向かう。

「ちよ、ちよっと待ってくださいいよ、店長さん！ これはなんなんですか？ また遊ぶ

つもりなんですか？ 仕事忙しくて、そんな暇ないんじや……」

焦って言葉を投げってくる苺に、爽は背を向けたまま軽く片手を振った。

「遊びなどではありませんよ。では明言通り、五分以内でお願いしますよ」

「で、でも……これも被るんですか？」

「ええ。五分以内に」

返事をした爽は、にやつきながら部屋をあとにした。

3 どっちも失礼（苺）

閉じたドアを、苺は睨みつけた。

まったく店長さんときたら、いったい今日は何を企んでいるんだろう？

思い切り頬を膨らませ、手にしたブーツを見つめる。

こいつはカツラだ。着替えるようにと言われた服と同様に真っ黒。黒くないのは、シャツだけ。

こんなものを苺にさせて、ほんとに何をするつもりなんだろう？ さっぱりわからないが、王様店長さんに命じられた以上、着替えるしかない。部下は上司に逆らえないのだよ……

でも……五分でだよ？ 十分って言われたタイムリミットを半分にしちゃったのは自分だ。

まさか、カツラまで用意されてるなんて思わなかったからさあ。

ひとりになった部屋でぶつぶつ文句を言いつつ、苺は急いで着替え始めた。

あーっ、駄目だあ。五分なんて言うんじゃないよ。

スーツは着られたのだが、ネクタイが結べないのだ。カツラもうまくつけられない。

どうしてもカツラの脇から地毛が出てしまう。なんとかしようとして弄っているうちに、超イライラしてきた。

「もおおっ！ こんな難し過ぎるよ！」

苺は、地団太を踏んでカツラを頭から引つpegし、思い切り投げた。

「う……」

パシッという音とともに、くぐもった声が聞こえ、ぎよっとする。

ちょうど藤原が部屋に入ってきたところらしく、顔にカツラがくつついていた。

「ああっ」

弁明しようと口を開いたが、カツラを顔に張りつけた藤原は、滑稽としか言いようがないわけで……

「ぶふっ」

「ぶふっ」

思わず噴き出した苺は、慌てて口を塞いだ。

「鈴木さん」

低い声で呼びかけられ、気が動転した苺は逃げ場を探した。だが残念ながら、どこにも逃げられそうな場所はない。苺は、ゆっくりと迫ってくる藤原の前に震え上がった。

「ご、ごめんです。わざとじゃないですよ」
身を締め、両手を合わせて謝罪する。

「ほら、ここに座りなさい」

雷が落ちるものと覚悟していた苺は、普通に話しかけられてほっとした。大人しく、指示された場所に腰かける。

すると藤原は黒いネットのようなものを箱から取り出し、慣れた手つきで苺の頭に装着した。そしてカツラを被せる。

「へえーっ。店長さん、うまいんですね？」

「色々と経験していますからね」

「カツラを被る経験ですか？」

「色々ですよ。さあ、できました。立って背筋を伸ばしてください」

「はいっ」

苺は返事と同時に立ち上がり、背筋を伸ばす。すると藤原はネクタイを手にし、あつという間に苺の襟元に結んでしまった。

「まあまあ……というところですね」

藤原は苺の全身を眺めて言う。

「こんな格好をさせて、苺に何をしろって言うんですか？」

「我々についてくるだけです」

「我々？」

「ええ」

藤原に手を取られ、苺は部屋から出た。

「要、どうだ？」

藤原は苺を藍原の正面に立たせて尋ねる。藍原は楽しそうな笑みを浮かべた。

「よろしいのでは」

「まあ、完璧からは程遠いが、それもまた一興だろう」

「なんだか面白くないお言葉をいただき、苺はちよいとむっとした。

「一興つてのはなんですか？ 嬉しくないんですけど……遊びじゃないんですよね？」

疑念が湧いた苺は改めて確認する。

「遊びでは……まあ、鈴木さんが参加しては、遊びになってしまいですけど……悪いことではないですよ。お前もそう思うだろう、要？」

「はい。悪くありませんね。私も楽しみになってきました」

藍原が澄ました顔で言うのと、藤原は少しばかり面白くなさそうな表情をしたが、すぐに気を取り直した様子で、「それはよかった」と素っ気なく返した。

「それで、吉田からはまだ……」

藤原がそう言ってドアに視線をやった途端、待ちかまえていたようにドアがノックされた。続いて「爽様」という声が聞こえてくる。

「あつ、善ちゃんだあ」

大好きな善ちゃんの声が聞こえ、嬉しくなった母は、ドアにすっ飛んで行ってパツと開けた。

「善ちゃん、おっはよう」

吉田は驚いた様子だったが、すぐに相好を崩した。

「鈴木様。おはようございます」

深々と頭を下げて挨拶する。顔を上げた吉田は、今度は藤原に恭しく声をかけた。

「爽様、お待たせいたしました」

「ああ。鈴木さんに渡してくれ」

吉田は手にしていたものを母の足元に置いた。

いま着ている黒いスーツに合わせたらぴったりの黒い靴だ。

母はさっそく靴を履いた。

「鈴木様、履き心地はいかがでしょうか？」

「いいですよ。ちょうどいいサイズです」

「吉田が、貴女に合うものを探し出してくれたんですよ」

藤原に声をかけられ、母は笑みを浮かべる。

「そうなんですか？ 善ちゃん、ありがとうございます」

お礼を言ったものの、なんとなく腑に落ちない。もちろん吉田が母のために奔走してくれたことは嬉しいが、母は別にこの靴が欲しかったわけではない。吉田にお礼を言うのは、どちらかというと藤原のほうが。

「うーむ。やはり背丈が……」

藤原が独り言のように呟いたので、母は首を傾げた。

「背丈？」

「もう十センチほど欲しいところですが……これでよしとするしかありませんね」

「大きくなるクッキーでも出してくれれば、食べますけど」

ちよいと皮肉っぽく言ってやると、藤原はくすつと笑った。

「魔法のクッキーは、残念ながら持ち合わせていません。さあ、行くでしょう」

最後の台詞は、この場にいる全員に向けられていた。

吉田に行ってきますと告げ、外に出ると、エントランスに大きな黒い車が横付けされていた。

これで出掛けるらしいが……

こんな格好をさせられた時点でわかってはいたが、今日は宝飾店の仕事のほうは休むらしい。

できれば、あんまり休みたくないんだけどなあ。店長さんに付き合わされて、サボってばかりいる気がする。

「鈴木さん」

車に向かって進もうとすると、背後から藍原に呼びかけられた。足を止めて振り返る。「わっ！」

苺は思わず叫んだ。

藍原は真つ黒なサングラスをかけていた。黒いスーツと相まって、まるで要人警護をするSPって感じだ。

うひょーっ、かっこいい！

そういうえば藍原さんは朝から黒いスーツを着ていたっけ？ サングラスをかけるまで、苺ってば気づかなかつたよ。

ありやっちゃっ？ よく考えたら、いまの苺の格好って、藍原さんとよく似てる……そんなことを考えていると、目の前にすつと黒いものを差し出された。

「えっ、サングラス？ い、苺もこいつをかけるんですか？」

「ええ。きつとお似合いになりますよ」

そ、そうだろうか？ これをかけたら、苺も藍原さんのように、かっこいいSPに見えるかな？

苺はわくわくしながら、サングラスをかけた。そして藤原に尋ねる。

「店長さん、苺どうですか？」

「……」

暗くなった視界に映る藤原は、苺を見つめるばかりで何も言わない。

「店長さん？」

「……ノーコメントで」

「ええっ！ なんでですか？」

不満をたっぷり滲ませて言っていると、藍原さんがにこしながら声をかけてきた。「お似合いですよ。いまの鈴木さんは、私のおまけのようです」

「はいっ？」

苺がぼかんとしている間に、藍原は車に向かってスタスタと歩き、助手席に乗り込んだ。啞然としていた苺だが、ボタンと車のドアが閉まる音で、我に返る。

隣にいる藤原の腕を、思わずガシッと掴んだ。

「い、いま……なんか、藍原さんに超失礼なことを言われた気がするんですけど？」

「ええ、気のせいではありませんよ」

あっさりと肯定した藤原は、「ほら、貴女もさっさと乗りなさい」と後部座席に母を押し込んだ。

車が走り出すと、隣に座った藤原はくすくす笑い出す。

「笑わないでくださいよ！」

「止まらないですよ。まったく腹立たしいですね」

先ほどから藤原は、無理やり着替えさせたくせにノーコメントと言ったり急に笑い出したり、意味深な行動ばかり。母は苛立ち、声を荒らげる。

「はあっ？ どういう意味ですか？」

「要にしてやられたようで、面白くないんですよ。……おまけ……ね」

またもや派手に嘔き出す。藤原は一向に態度を改めないし、藍原は母を自分の添え物みたいに言うし……

まったく、どっちも超失礼だ。

むかついた母は、めいっばい頬を膨らませたのだった。

4 自信満々なおまけ 〈爽〉

まったく要のやつめ……

母にサングラスを用意するようと言ったのは、この自分だ。黒いスーツを着せても、背の低い彼女では威圧感が足りない。それでサングラスでもかけさせてみるかと思いついたのだ。

けれど、サングラスをかけた母を見ると、どうにも笑いが込み上げてならない。黒服に短髪の黒いウィッグ、そしてサングラスという、男っぽいスタイルなのに……ぷーつと頬を膨らませる母は、まるで中学生くらいの男の子がふて腐れているようにしか見えない。

爽は母から目を逸らし、居住まいを正して腕を組んだ。

今日は一日かけて、経営している店舗を視察することになっている。

母を連れていくつもりはなかったのだが……要から、母も視察に同行させてはどうかと提案されたのだ。

元々、店に母を残して行くのが心配だったから、その提案はすぐに採用した。

だが、普段の苺が一緒にいたら、視察の場に必要ない緊張感が薄まってしまふ。それで要と同じ服を着せることにしたのだが……

爽はもう一度、苺の姿を見ようとしたが、やめておいた。また笑いが止められなくなりそうだ。

まあ、黙ってさえすれば、それなりに威圧感を漂わせられる……かもしれない。

爽は鞆からあるものを取り出し、苺に呼びかけた。

「鈴木さん」

「はい」

「これを」

「なんですか、これ？」

苺に渡したものは、書類の束が挟んであるクリップボードとペン。

「これから、ここにリストアップしている店舗を回りますから、貴女は調査票の空欄を埋めてください」

「調査票……？」

苺は首を傾げつつ、書類に目を通す。

「難しく考えなくていいんですよ。鈴木さんが感じたことをそのまま書いてくださればいいんです」

「店の第一印象。店内の様子。スタッフルームの様子。店員の接客態度。その他気になるところ？」

苺は書いてある通りに読み上げる。爽は頷いた。

「私が店の者たちと話をしている間、貴女は自由に店内を回って、その項目について感じたことを記入して下さい」

「ふーん」

何を考えているのか、苺は不思議な反応をする。

「それと……私がいいと言うまで、しっかりと口を閉じていなさい。口を開いていると、間抜けに見えますからね」

「ま、間抜け？ 店長さん、失礼ですね」

「気を抜いてほしくないのですよ。私の補佐としてついてくる以上、きちんとやってくれなくては困りますからね」

「補佐？ 苺、店長さんの補佐なんですか？」

「ええ。要と同じ立場です」

「へーっ。藍原さんと同じですか。な、なんか苺、急にお偉くなったみたいで、ドキドキですよ」

『お偉く』という言葉に軽く噴きそうになったが、爽は顔をしかめて堪えた。

「了解ですよ。SPには沈黙が似合いますよね。苺、精一杯、務めますよお」
は……SP？

おやおや、ずいぶん大きく出たものだな。とても護衛している者には見えないが……
まあいい。ならば、SPらしく振舞おうとする苺を見て、楽しませてもらうでしょう。

最初の視察を終え、車に戻った爽は、ぐったりと座席にもたれた。笑いを堪えすぎて
疲れるなんて、初めての体験だ。要も必死に笑いを堪えていた。

笑いを誘っている張本人は、ふたりの様子に気づきもせず、どこまでも真面目に命令
に従っていた。

……ああ、駄目だ。

「ぶ、ぶふっ」

口を閉じたまま噴き出し、おかしい音を出してしまった。慌てて手のひらで口を塞ぐ。
「店長さん、どうし……あつ、い、いまはしゃべってもいいですよね？」

爽は口を塞いだまま頷いた。苺はほっとした様子で、胸に手を当ててる。

「よかった。それで、どうしたんですか？ むせちゃったとかですか？」

「え、ええ……。それより鈴木さん、上出来でしたよ」

店の者たちは苺の存在に、おおいに困惑させられていた。

クリップボードを手に、店内を無言で闊歩する彼女に、どう対応すればいいかわから
なかったようだ。苺に対してひどく緊張していて、それを見ているだけで笑えてならな
かった。

もちろん大事な視察だ。いつものように厳しく意見した。

「えへへえ。実は苺も、なかなかだったと思うですよ」

照れくさそうに、黒いサングラスをかけた苺が言う。黒服、短い黒髪もそのままだ。

正直、腹を抱えて笑いこけたい。

「ちゃんとお役に立てたですか？」

「おやおや、鈴木さん、気が早いですね。評価はすべてが終わってからですよ」

「それはそうですね。それで、あと何店くらい視察するんですか？」

「聞かないほうがいいですよ。先は長いとだけ言っておきましょう」

「どんと来いですよ。苺、コツは覚えたし、もうしっかりやれるですから」

これ以上、笑わさないでほしい。

自信満々に言う苺の口を塞いでやりたかった。

5 癒しの力と、ドキンな触れ合い（苺）

藤原の視察のお供として、たくさんの店舗を回った翌日。

朝からお店に出勤した苺は、固く絞った雑巾で床を拭いていた。ピカピカになった床を見て笑みを浮かべる。それから屈めていた身体をよっこいしょと起こす。

スタッフルームの掃除が、ようやく終わった。

今日は十二月二十八日。暮れが間近にやってきたため、苺は朝から大掃除をしている。

藤原は、応援のスタッフと店頭に出ている。

昨日の視察が終わったのは、なんと夜の九時過ぎ。さすがに最後に行ったお店では、頭がぼんやりしてしまった。

変装してお仕事をさせられるなんて、思ってもいなかった。

でも、すごく楽しかった。藍原とお揃いのスーツを着て、カツラを被り、サングラスまでかけたのだ。

調査票には、思ったことをそのまま書いた。少しは役に立つといいなあ。

まあ、それよりいまは掃除に専念しよう。さて、今度は……どこをピカピカにしよう？

給湯室は最後にして、次は、苺専用の更衣室を片づけようか。

バケツと雑巾を持って、更衣室に入る。

部屋の三分の一は備品で埋まっているが、綺麗に積んであるから雑然とした印象はない。素敵な家具が置いてあって、更衣室というより誰かの私室という感じだ。一人で使うにはもったいないくらい、贅沢な部屋。この部屋の隣には男のひとたちの更衣室があるが、そこらは入ったことがない。そっちの大掃除は後日、藍原と岡島怜がやるから、苺はやらなくていいと言われた。先輩にやらせるなんて申し訳ないけど……男のひとの更衣室には入れないもね。

その藍原は、今日はお休み。岡島はお昼からやってくる予定になっている。

なんでか知らないけど、スタッフさんは男のひとばかりなんだよね。店長さんのお屋敷でも女性のスタッフさんは見たことがないし。……もしかして、ひとりもないのかな？ たまたま苺が見ていないだけ？

考え込んでいた苺は、ドアをトントンとせっかちに叩く音を耳にして振り返った。

「は、はい」

「鈴木さん」

藤原の声だ。どうも機嫌がよくなさそうだ。

苺は急いでドアを開けた。

「なっ、なんですか？」

「もう十時を過ぎていますよ。お茶の準備はどうしたんです」

藤原は叱責するように言ったあと、さっさと店頭に戻っていく。
ちえっ！

一生懸命掃除をしたから、お茶の時間を忘れてただけなのにさ……

苺は頬を膨らませて給湯室に向かった。

ほんと、意地悪店長さんだよ。というか、意地悪継母！

内心でぶつぶつ文句を言っていた苺だったが、ある考えに思い至り、にはっと笑った。
いまの苺って、ちょっとシンデレラみたいじゃないか？

雑巾持たされて、汗水たらして床拭いたり、お茶淹れたりさ。

むふふ。

……てことは、意地悪な義理の姉たちは藍原さんと岡島さん？

いやいや、それは違うな。

あのおふたりは、ぜんぜん意地悪じゃない。とつてもやさしい。そんな役をあてがうのは失礼だ。

やっぱ、意地悪姉には……健太と剛が適任だな。

兄の健太は現在妊娠中のお嫁さんの真美にはやさしいが、妹の苺のことは「いちごう」

と呼び、子分扱い。幼馴染の二ノ宮剛も、顔を合わせれば憎たらしいことばかり言ってくる。

うん、このふたりが適役だ。にやついていた苺は、眉を寄せて考え込んだ。

なら、王子様は？

王子様ねえ……？

頭にほんと藤原が浮かび、苺は唇を尖らせた。

ダメダメ。店長さんは、意地悪継母役だもん。

そう思うのに、藤原はなかなか王子様役から降りてくれない。

やれやれ……店長さんってば、苺の脳内ですら、超わがままだよ。

苺は苦笑をもらした。

お茶を淹れて休憩したあと、苺専用の更衣室の掃除を済ませる。昼食を挟んでからは給湯室の掃除に取りかかった。

ここは細々とした物が多く、それらをどかしながら掃除をするので手間がかかる。

掃除に没頭していた苺は、ドアの開く音を耳にし、屈んでいた身体を起こして振り返った。

「ああ、鈴木さん、ご苦労様です」

「あっ、岡島さん」

苺は給湯室にずっといたので、昼過ぎにやってきた岡島とは、まだ顔を合わせていなかった。

「もう休憩の時間になっちゃったですか？」

そんなに時間が経ったのかと驚く。

「まだ二時半です。爽様から今日はシフトの都合で、先に休憩を取るよう言われたのですよ」

「そうなんですか。……そうじゃ、お茶の準備しますね」

「いえ。鈴木さんは掃除のほうで手一杯でしょう。自分でやりますから」

「大丈夫ですよ。すぐに支度しますね。もう一人のスタッフさんも一緒に休憩するですか？」

「ええ……ですが、本当にお任せしてよろしいのですか？」

岡島は、掃除の途中で散らかっている給湯室を見回しながら言う。

「もうここだけなんです。夕方までには終わらせられるですよ。苺、紅茶もコーヒーもうまく淹れられるようになったんですよ」

苺は岡島に飲みたいものを尋ね、すぐに準備にとりかかった。

彼はまだ、給湯室の入り口に立っている。

「今日も履いてくださっているんですね」

「はい？」

食器棚からティーカップを取り出していた苺は、岡島の視線をたどった。苺の足元を見ている。

ああ、このブーツのことか。藍原と岡島から、クリスマスプレゼントにもらったピンクのブーツだ。ボンボンがついていて、とっても可愛い。今日はこのブーツに合わせて、水色のメイド服を着た。

「はい。もう、すっごく気に入ってますから。これを履いてるだけで、ハッピーな気分になれちゃいます」

岡島は目を細めて頷く。

こうして見ると、やっぱり女のひとみたいだ。

「どうかしましたか？」

顔をじっと見つめ過ぎたらしい。戸惑い気味に聞かれ、苺は笑って、なんでもない、と手を振った。

「岡島さん、綺麗だなんて思って」

「あ……ど、どうも。ですが、あまり喜べません」

頬をほんのりと赤く染めた岡島は、困ったように言う。

艶^{つや}っぽい表情になり、苺はちょっとドキリとしてしまった。
 そっか……綺麗というのは、男性にとっては褒め言葉にならないのかな？

「もっと男らしい顔つきになりたいんですけど……」

岡島の発言に、苺は思わず「ええっ！」と声を上げた。

そんな、もったいない。

「私が男らしい顔つきになりたいと望んでは、おかしいですか？」

「おかしくはないですよ。岡島さんはいまのままです。十分素敵だから、驚いちゃって。それに男らしさは見た目とは関係ないですよ。内面が男らしければいいんじゃないですか？」

岡島は苺をじーっと見つめたあと、ふわっとやわらかな笑みを浮かべた。

「おっしゃる通りですね。鈴木さん、ありがとうございます」

岡島は軽く頭を下げ、給湯室から出て行った。

なぜ、お礼を言われたんだろう？

苺はお茶の支度をしながら、首を傾げた。

岡島たちが休憩を終え、入れ代わりで藤原と苺が休憩に入った。

飲み物を持ってスタッフルームに行くと、例の如く藤原はパソコンに張りついている。

「ずいぶんと忙しそうだ。店長さんが経営しているのは、この宝飾店だけじゃないんだから、忙しくて当然だよね。」

「店長さん」

苺は、瞬^{またた}きもせずに集中している藤原に、そっと声をかけた。

「はい」

藤原はパソコンの画面を凝視したまま、上の空で返事をした。

「コーヒーどうぞ」

パソコンの横にコーヒーを置き、苺は藤原の真向かいに座った。

苺は自分用にハーブティーを淹^いれた。この給湯室には何種類もの茶葉があるから、苺は色々試して楽しんでいる。

いろんな茶葉を、自分の好みでブレンドできるということも藤原に教わった。

午前中に飲んだのは黄色っぽかったけど、これは赤い。一口啜^すった苺は、「す、すっぱー！」と思わず叫んだ。

「ハイビスカスですか？」

苺が手にしているカップを見つめ、店長さんが言う。

「あ、はい」

一目見ただけで当てちゃうとは、びっくりだ。

「なんか、南国に行った気分になれるかなあなんて思って、葉をたっぷり入れすぎちゃいました」

「頭がスッキリしそうですね。鈴木さん、一口いただけますか？」

「それじゃ、すぐに淹れて……」

立ち上がろうとすると、藤原が止めた。

「鈴木さんのでいいですよ。一口だけ」

そう言うと、藤原は苺のカップを手に取り、口をつける。

「うん。いいですね。リフレッシュできた気分です。鈴木さん、ありがとうございました」

そう言って、店長さんは肩の凝りをほぐすように腕をまわす。ずいぶんと疲れているようだ。

「店長さん、疲れてるんでしょう？」

「ええ……まあ……」

苺は急いで立ち上がり、藤原の後ろに回って肩に手をかけた。

「鈴木さん？」

困惑している藤原に構わず、苺は肩を揉み始める。

「おおつ、やつぱり凝ってるですねえ」

「そうですね？」

「店長さんのパソコンの中には、そんなに仕事があるですか？」

苺は真面目に聞いたのに、藤原はおかしそうに笑い出した。

「年末ですからね」

藤原はコーヒーを啜る。

苺は藤原の肩をほぐすのに、しばし熱中した。

目の前にある藤原の背中からは、苺を虜にするようないい香りがする。

店長さんって、どうしてこんなにいい匂いにするんだろう？ かぷっとかぶりつきたくなる。

「鈴木さん、もういいですよ。鈴木さんのお茶が冷めてしまう」

「そんなこといいですよ。……ねえ店長さん、少しは疲れが取れましたか？」

苺は後ろから、藤原の顔を覗き込んで尋ねた。

「ええ。充分取れました」

藤原はそう言いながら、肩に乗っている苺の右手に自分の手を重ねてきた。その触れ合いに、心臓がドキンと跳ねる。

「鈴木さんの手には、癒しの力があるようですね」

「い、癒し？ そんな力なんかありませんよ」

「ですが、私は感じるんですよ」

藤原は苺の手をぎゅっと一度握りしめてから離れた。

「鈴木さん、それを片づけ終えたら着替えなさい。今日はこれで帰ります」

カップをトレーに載せて、給湯室に向かおうとした苺は、藤原の言葉に驚いて振り返った。

「も、もう帰るですか？」

だって、まだ四時なのに。

「ええ。行くところがありますからね」

……またか？ 今度はいったい、どこに行くのだろうか？

「でも、まだ給湯室の掃除が終わってないんですよ。もう一時間待つてくれませんか？」

「それでは……二十分だけ待ちましょう。二十分で終わらせなさい」

高圧的な口調で言われ反抗できない。苺は慌てて掃除を再開し、なんとか二十分で終わらせた。

「どこに行くのか、今度も教えてくれないんですか？」

店をあとにしてショッピングセンターの中を歩きながら尋ねると、藤原はじーっと苺を見つめる。何か企たくらんでいる眼差しだ。

「聞きたいですか？」

苺は藤原を見返し、数秒考えてから口を開いた。

「店長さん、教えたいですか？」

藤原はふっと笑う。

「教えたくありませんね」

やっぱり、そう言うと思ったよ。

「じゃあ、いいです。また目的地に着いてから、苺はびっくりすることにしますよ」
藤原には驚かされてばかりだから、耐性たせいがついてきたと思う。

そんなに簡単には、びっくりしないぞ。

自信たっぷり、苺はやついた。

6 手痛いロス 爽

「店長さん、どこかに行くんじゃないかなかったですか？」

ワンルームマンションの駐車場に車を停めたところで、苺が怪訝けげんそうに尋ねる。
肩すかしを食らった気分なのだろう。だが、ここは単なる通過地点だ。

爽は少し離れた場所に停まっているもう一台の車を確認すると、その車の運転手と視

線を合わせた。運転手は爽を見て頷いたが、爽はあえて、なんのリアクションも返さなかった。まだ苺に気づかれたくない。

運転席のドアを開けて、爽は助手席に座っている苺に声をかけた。

「行きますよ」

それだけ言って車を降りる。苺はさらに戸惑ったようだ。

「行きますよって……部屋に帰るんですか？」

苺も車から降りて、爽と並ぶ。

「ええ。着替えなければなりませんから」

爽はマンシヨンのエントランスに着くと、中に入るよう苺を促した。

「着替え？」

苺が、いま着ている赤っぽい厚手のセーターとチェックのスカートを見る。

「これじゃ駄目なんですか？」

そう言った苺は、何か思い当たるフシがあったのか、ハツとした顔をした。

「あ、あの……店長さん、もしかして行くところって……」

苺はひどく顔を強張らせている。どうやら、目的地を予想したようだが……いったいどこに行くと思っただらうか？

「それは内緒のままがいいと、おっしゃいましたよ」

「まあ、そう言ったですけど……」

エレベーターに乗り込み、最上階のボタンを押す。

「苺、ひとりでお留守番してるですよ」

予想外の台詞に、爽は眉を寄せた。

「鈴木さん、急にどうして？」

「なんかその……行かないほうがいいかなあって……」

尻込みし始めた苺の心中がわからない。

「とりあえず部屋に行きましょう」

爽は苺の背中を押して、部屋に向かった。

「どうしても行かないとおっしゃるんですか？」

ソファにちよこんと座った苺を、爽は見下ろした。実を言うと、内心は苛立っている。早く着替えさせないと、間に合わなくなってしまう。

「だ、だって……」

目的地を教えれば行く気になるだろうが、ここでバラしては面白くない。いや、もしかすると目的地を知ったら、いまよりもっと嫌がるかもしれない。

「店長さん一人で行ってきてください。苺はお留守番……」

「鈴木さんが行かないのであれば、中止しますよ」
腕時計で時間を確認しつつ、もういつそ取りやめるか、それとも無理やりにも連れ
て行こうかと迷う。

「えっ？ け、けど……」

母はソファから立ち上がり、慌てて言う。

「それだと、店長さんのおばあちゃんが、がっかりしますよ……」
爽は眉をひそめた。それを見た母は気まずそうに顔を歪める。

「祖母？ どうして祖母が、がっかりするのですか？ ……ああ、祖母の家に行くと思っ
たんですね？」

「べ、別に、そ、そんなことは……その……」

しばらくすると、母は、諦めたように「ごめんなさい」と謝る。

「謝る必要などありませんよ」

しよげている母を見て、爽はくすくす笑った。

「だって……クリスマスプレゼントのことがあるし……」

プレゼント？ あ、ああ、なんだそういうことか……

「鈴木さん、安心してください。これから行くところは祖母の屋敷ではありませんよ」

「そ、そうなんですか？」

「そうですね。まったく貴女はいつも早合点して……」

いや、もうぐだぐだ言っている場合じゃない。

「ほら、かなり時間をロスしてしまいましたよ。鈴木さん、急いで着替えてください」
気持ちを切り替えた爽は、母を急かした。

「ああ、そうだ。あつたかそうなコートを持っていましたよね？ それも忘れないように」

「な、何を着てればいいんですか？」

やれやれ、母には任せておけない。

爽は母のクローゼットに歩み寄った。

さっさと出かけないと、せつかくの計画がおじゃんになる。一分でも遅れてしまっ
たら、もう取り返しはつかないのだ。

爽はざっと母の服を選び、ベッドの上に置いた。

「これでいいでしょう。私は洗面所で着替えてきます。とにかく時間がありません、急
いでください」

母をさらに急かし、自分の着替えを手にして洗面所に飛び込む。爽は手早く着替えた。
「着替え終わりましたか？」

ドアの外から声をかける。さすがにまだ早すぎるかと思っただのに、中から「はい」と
いう声が返ってきて爽は驚いてしまった。

まったく母ときたら、支度だけは早いのだろうか。

「行きますよ」

腕を掴んで外へ連れ出そうとすると、コートを抱えた母は、「バ、バッグ」と叫び、いつも持ち歩いているバッグを掴んだ。

身なりさえ整っていれば、母が何を忘れようと大きな問題はない。

母を急かし、マンションを出る。

先ほどの車は、エントランスの前に横付けしてあった。

私たちが出てきたらすぐに乗れるようにと、はからってくれたのだろう。

夕方は道が混雑するから、おそらく到着はギリギリになるだろうな。

「爽様。お早く」

運転手に早く乗るように急かされる。

「ああ、ご苦労」

後部座席のドアを開けて、先に母を乗り込ませた。

彼女はこの事態にひどく戸惑っているのだろうが、爽と運転手が焦りを露わにしているからか、素直に従ってくれる。

「間に合いそうか？」

すぐに車が走り出し、爽は運転手に話しかけた。

「はい、なんとか間に合わせます」

「うむ、頼む」

座席にもたれると、母にちよいちよいと腕を突かれた。

「こ、この車で行くんですか？ 店長さんの車で行くんだと……」

驚いている母に、にやつきそうになる。

だが、にやついている場合ではない。間に合わなければ、そこで計画は失敗に終わってしまう。

時間ばかり気にしていたら、母が爽にもたれかかってきた。

なんだ、おとなしいと思ったら、寝ていたのか？

どこに行くのかと、さんざん気にしていたくせに、眠ってしまうなんて……

だが、このほうが都合がいい。目的地に到着したとき、とんでもなく驚くだろう。

無防備な母の寝顔を見つめた爽は、くすりと笑い、彼女の頬をそつと突いた。

7 悪くない心変わり く母

ぐっすり眠り込んでいた母は、身体を揺さぶられ、なんとか目を覚ました。

「鈴木さん、降りますよ」

降りる？ ああ、車に乗ってたんだけ……

「は、はいです。ついたられすか？」

どこに着いたんだらう？ と考えながら、大あくびをする。

「まだですよ」

まだ？

「そ、そうなん……あれっ、ならなんで車を降りるんですか？」

車から引きずり降ろされながら、苺は尋ねた。

外はものすごく寒く、ぶるつと身が震える。けれどおかげで目が冴えてきた。

「では爽様、お気をつけて」

「ああ、ありがとう」

苺が睨りかけている間に、いったいどこにやって来たんだらう？

苺は目をこすり、周りを確認しようとしたが、その前に藤原に腕を取られて、強引に

歩かされてしまう。

「店長さん、ここはどこなんですか？ あっ、苺のバッグ」

「私が持っていますよ」

「苺、自分で持つですよ」

「私が持つておきますよ。鈴木さんはまだ寝ぼけていらっしやるようですし、そこらに落としては困るでしょう？」

「はあ」

反論できず、曖昧に返す。

苺は藤原に腕を取られたまま、周囲を眺め回した。

おや、ここって？ 周りを歩いているひとたちは、みんな大きな鞆を持っているし、

お土産屋さんが並んでいる。駅なのかな？

「店長さん？ こんなところに来て何を……？」

「鈴木さん、さあこちらですよ」

藤原は苺にはまるで構わず、ぐいぐいと引っ張っていく。

さすがの苺も、ここがどこだか気づいた。

く、空港じゃないか！

アワアワしている間に、苺はゴージャスなソファに座らされた。藤原が隣に座る。

こっ、この部屋……なんなんだ？ ほかにも人はいるけど、それほど多くない。

制服を着た綺麗なお姉さんが、飲み物なんかを振舞ってくれたりして……

飛行機には乗ったことはないが、ここが普通の待ち合い室じゃないことくらい苺にもわかる。

この高級な雰囲気は普通じゃない。いや、そんなことより……

「あの、ここは？」

動揺いっぱい、苺は尋ねた。

「ラウンジですよ」

ラウンジ？

「あのー、まさかと思うですけど……」

チェックインカウンターってところで手続きし、ここにやってきたんだから……と、当然、飛行機に乗るんだよね？ 空港を観光しただけで帰るなんて、あるわけない。

ならば、苺はどこに連れて行かれるのだ。

ま、まさか、海外なんてこと……？

一瞬、背筋に冷たいものが走ったが、そんなはずはないと自分を落ち着かせる。

だってまだ、苺はパスポートを持っていない。

「いったい、苺をどこに連れて行くつもりなんですか？」

藤原の腕を大きく揺さぶりながら問い詰めたが、「着いてからのお楽しみですよ」としか答えてくれない。

ほ、ほんとに、これから飛行機に乗るってのか？

「さあ、時間のようです。鈴木さん、行きましょう」

「で、でも……でもですね。い、苺は」

「大丈夫ですよ。私がついているんですから」

そんな、自信満々に言われても……

「い、苺、空飛ぶ乗り物より、新幹線とかバスとかですわね……」

「苺！ 行きますよ、立って下さい！」

びっくーん！

鋭い声にびびった苺は、口を閉じてさっと立ち上がった。

連行される犯人のような歩みで辿り着いた先は、もちろん飛行機の中だった。

苺は生きた心地がしなかった。

「と、飛ぶですか？ 飛ぶですか？」

窓から見える外の風景が動き出したことに気づいた苺は、悲鳴のように叫んだ。

これからビュビューンとスピードが増して、ゴゴオオーツと空めがけて飛んでゆくのか？

「まだですよ」

隣に座っている藤原は、苺のほうに目もやらずに言う。

いま現在、飛行機は後方へ動いている。

ま、まさか、バックしたまま飛ぶんじゃないよね？

「いつ飛ぶんですか？ 前に向かって飛ぶんですよね？」

鈴木さん、少し落ち着きなさい。恐れることなどありませんよ」

藤原は、少々呆れながらもだめてくれる。けれど、母は半べそで右隣に座る藤原を睨んだ。

なんでいま、母は飛行機なんでもんに乗ってるのか……

「店長さんはなんでも突然すぎるんですよ。母は飛行機に乗るなんて、これっぽっちも聞いちゃいませんでしたよ」

「聞かないとおっしゃいましたよ」

「飛行機に乗るだなんて、思いもしなかったからですよお」

そのとき飛行機がゆっくと向きを変えた。今度はぐんぐん前進し始める。

いよいよかと、母はごくりと唾を呑み込んだ。緊張から肘掛けを掴む手に力がこもる。

その手を藤原が「大丈夫ですから」と言っ、握りしめてきた。

母は藁にもすがる思いで、藤原の手をぎゅっと握り返す。

「鈴木さん、どうしてそんなに恐れるんです？」

「おっ……」

落っこちるかもしれないからですよ、と言おうとした母だが、そんな不吉なことを口

にしたら、本当に落ちるかもしれないと思い、やめた。

「落ちはしませんよ」

藤原の言葉に、母は顔を強張らせ、きゅっと身を縮めた。

「な、な、な、なんで言うんですかあ〜」

「気にしすぎです」

母はぶうつとほつぺたを膨らませた。鼻の頭に皺を寄せて、ぶいっとそっぽを向く。

小さな窓から外を見ると、飛行機は大きく旋回し、景色ががらっと変わっていた。

アナウンスが聞こえ、機内が暗くなった。どきりとしたところで、凄まじい轟音が響

き始める。固まっていると、ぐんと身体が重くなり、背もたれに押しつけられたような

気がした。

「うおおおおお……」

自然と「お」を連発してしまう。

右手をがっちり握ってくれている藤原の手の中で、母は拳を固める。

「うつくく……」

身体を押しつけてくるGに耐えていると、はつきりと、ふっと身体が浮く感覚がした。

う、浮いたっ！

母は恐怖を忘れて、急いで窓の外を見た。

「マ、マジですかあ〜?」

見事な夜景だ。無数の光が輝いている。

そして圧巻あつかんなのは、オレンジ色のライン。

「店长さん、あのオレンジ色のラインは車の灯りあかですか?」

不思議い。

くっくっという笑い声が聞こえ、苺は藤原のほうを振り返った。

「なんで笑うですか?」

「いえ。先ほどまであんなに駄々だだをこねていたのに……すいぶんとはしゃいでいらっしやるので」

苺はきゅっと眉を寄せた。

「だって苺、いま空にいるんですよ」

普段では味わえない体験をしている最中なのだ。そりゃ興奮もする。

「飛行機に乗っているのですから、空を飛ぶのは当たり前ですよ」

当たり前か……確かにその通りだけどさ、そんな身も蓋ふたもない言い方をしなくても……

「……夢がないですよお」

不満を感じてぶつぶつと呟つぶやく。

「もう怖くはないんですか?」

顔をしかめた苺は、藤原に握られている右手を、そのまま自分の胸に当て、うーんと考え込んだ。

「感動してるし、ドキドキウキウキしてますけど……怖い気持ちも残ってるかも」

「その反応は、もっともだと思えますよ」

藤原は、苺のほうにぐっと身を乗り出してきた。そして苺と顔をくっつけるようにして窓の外に目を向ける。

飛行機はずいぶん高いところまで上がったようで、地上はぼんやりとしか見えない。

「昼間だと、もっと景色を楽しめたのですが」

「夜の飛行機も悪くないですよ。すっごく幻想的です」

鉄の塊かたまりが空を飛ぶことが理解できなくて、乗るのが恐かったんだけど……この体験ができてよかったと、いまは心から思う。

苺は藤原に、にこっと笑いかけた。

「なんですか?」

「ううん。ただ、店长さんに、ありがたうって言いたくて」

藤原は困ったような表情をしている。苺はなんとなく照れくさくなり、すでに真っ暗になった窓の外に再び目をやったのだった。

8 詰め込まれた言いたいこと (爽)

「お待たせいたしました」

頼んでおいた飲み物を、客室乗務員が持ってきてくれた。

母はオレンジジュース、爽は紅茶だ。

先にオレンジジュースを受け取り、母に渡す。

「ありがとうございます」

母はなぜか小声でお礼を言う。どうやら緊張しているようだ。

客室乗務員相手に、どうして緊張するのか？

乗務員が立ち去った途端、母は肩の力を抜いた。そしてオレンジジュースを一口飲み、

「美味しい」と感激した声を上げる。

「飛行機ってすごいですね。こんな美味しい飲み物まで出てくるなんて、びっくりですよ。店長さんの紅茶も美味しいですか？」

まだ口にしていなかった爽は、口を潤す程度に飲んでみた。普段飲んでいるものほどではないが、悪くはない。

「美味しいですよ。それなりに……」

「それなりに、ですか？」

からかうように言われて、爽は母の鼻をつんと突いた。

そんなことをされるとは思っていなかったらしい母は、「わわっ」と驚く。面白い。爽は改めて、母との関係を考える。

言動のおかしな彼女を気に入ってしまい、常に自分の手元に置いている。けれど、自分自身が、母をどういう存在と捉えているのかよくわからない。

女として意識しているかという点、微妙だし……

なんせ、母には色気がない。先ほどの離陸のときのリアクションにしたって、乙女としては○点だ。……なのに、子どもとも思えない。

色気がないくせに、思わぬところで私をドキリとさせる。

母について黙考していた爽は、顔をしかめた。

考えれば考えるほど、わからなくなってくるな。

「店長さん」

ゆっくり紅茶を味わっていると、母に声をかけられた。

「なんですか？」

それにしても、クリスマスのあの日、互いを名前で呼ぶことにしたはずなのに、結局、